
深紅の花

日向梨久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深紅の花

【Nコード】

N5771B

【作者名】

日向梨久

【あらすじ】

ゆずるが見付けたのは、真っ赤な花弁を持つ、魅惑的な花でした。

その花には幻覚作用があると言う。

五感を麻痺させ、人を夢見心地にさせる。

深紅の花弁。その花から発せられる甘美な香りに、人々は酔いしれる。

倉科ゆずるは、道端に生息するその花を見付けた。

毒々しいまでの紅色の花弁に、ゆずるは立ち止まり、それを見つめた。

普段使用している通学路で、空き地になっている場所に、その花はたった一輪、咲いていた。

今朝通った時は気付かなかった。否、まだ今朝は咲いていなかったのかも知れない。とにかく、ゆずるはその花に心を奪われた。

そう広くも無かったが、雑草一つ生えていない殺伐とした空き地である。その様な中に、たった一輪だけ、と言うのにも心惹かれた。

ゆずるはその花を丁寧に掘り起こすと、根を傷付けないように周囲の土も一緒に手の中へ収めた。まるで硝子細工でも扱う様な手付きで、ゆずるはそれを家に持ち帰った。

手頃な大きさの植木鉢に、ゆずるはその花を丁寧に埋めた。ガーデニングが趣味の母親の持ち物から拝借した植木鉢である。数え切れない程ある植木鉢であるから、一つ無くなっても気付かないだろう。

自室の出窓の、一番日当たりの良い場所にその植木鉢を置いた。

普段、植物や動物に滅多に関心を示さないゆずるも、その花だけは違った。

太陽の光を浴びて、美しく輝く深紅の花弁。ゆずるはその様子をう

つとりと見つめた。

夜になると余計にその美しさは際立った。

月光を浴びて、艶かしく輝く深紅の花弁。甘美な香りが辺りを包み込み、ゆずるは何とも言えない心地良さを覚えた。

透き通った透明な水面に身体を委ね、ふわふわと漂う感覚。

ゆずるはその心地良さに酔いしれた。全身を委ね、深紅の花弁が誘う甘美な誘惑に溺れた。

ゆずるは毎日飽きる事無く深紅の花弁を眺めた。しかしその紅色は次第に色を失って行っているかの様に思えた。

水をあげてみた。肥料をあげてみた。

しかし結果は同じだった。それどころか悪化する一方だった。

ゆずるには植物に関する基礎知識が無い。母親にそれとなく訊ね、あれこれと教わって見たものの、花弁は徐々に色を失っていった。

なんて事だろう。

ゆずるは困惑した。深紅の花弁がなくなる。甘美な香りも弱まっている。

あの心地良い感覚は、もう得られないのだろうか。

そしてふと思いついた。

あの深紅の花弁が何かに似ている事に。

それは『血』だ。

深紅の花弁は深紅の血の色に似ている。

ゆずるは机の引出しからカッターナイフを取り出した。そして左手の人差し指にその刃をあてがった。

ぷつくりと、小さな血溜りが指先に浮き上がる。不思議と痛みは全く感じなかった。

ぱたりと植木鉢の中に垂らした。一瞬、花が喜んだ気がした。

次の日、深紅の花弁は以前の色を取り戻していた。ゆずるは歓喜した。その夜にはあの甘美な香りまでもが戻っていた。ゆずるはまたその甘美な香りに酔いしれた。ふわふわと水面を漂い、ただただ心を無にして。

だが、その幸せも長くは続かなかった。紅色も香りも、また徐々にその効果を失った。

その度にゆずるは自分を傷付け、花にそれを与えた。

「ゆずる、大丈夫か？」

血の気の失せた友人を気遣うように、村田智里はその顔を覗き込んだ。

ゆずるの腕には包帯が巻かれていた。そしてその顔は真っ青で、今にも倒れそうな感じだ。

この一週間で、ゆずるは急激に体調を崩して行った。辛うじて登校はして来てはいるが、その顔色からは長い闘病中の病人を思わせる。

「大丈夫か？」

智里はもう一度訊ねた。

「大丈夫」

小さく答えて、ゆずるは腕を庇うようにしてその包帯を隠した。

智里とゆずるは、小学校からの友人だった。親友とまでは呼べないにしても、一緒に遊び、一緒に下校したりと、それなりの友情があった筈だ。

ところが、一週間前からゆずるの様子は変わり、一緒に遊ぶ事も一緒に下校する事もなくなった。それに加え、劇的なまでの体調の悪化だ。

智里は困惑した。

友人が何か困ってる事があるのであれば助けたい。そんな意思が智里にはあったからだ。

だが、当の本人は何も語ってはくれない。それどころか完全に心を

閉ざしてしまっている様に見えた。

「ゆずる、何か困った事があるのなら助けになるから。俺たち友達だろう？なあ、頼むよ。話してくれ」

智里は意を決してそう切り出した。ゆずるの目は何処か虚ろで、その目が智里を認識しているかどうかも定かではなかった。

「…本当に助けしてくれるのか？」

数秒の沈黙の後、ゆずるが呟く様にして言った。その目は智里を捉えてはいたが、淀んでいる様に見えた。ゾクリと智里は身を強張らせた。

「本当に助けしてくれるのか？」

再度ゆずるが問うた。

智里はこくりと頷いた。それ以外の動作が出来なかった。

ゆずるは、智里に泊まって欲しいと言った。理由は言わなかった。

智里もあえて何も聞かず、それを承諾した。

学校が終わり、一度帰宅して宿泊準備を整えた智里は、ゆずるの家へ向かった。宿泊準備といっても、下着の替えと寝巻き代わりのジヤージくらいであったが。

ゆずるの家に到着すると、学校での様子とは正反対のゆずるが笑顔で智里を迎えた。一瞬躊躇したが、促されるままに家へと招き入れられた。

夕食は既に用意されていた。ゆずるの母親も笑顔で智里を歓迎し、三人で和気藹々と食卓を囲みながら晚餐を楽しんだ。

全く予期していなかった展開に、智里は最初戸惑いを見せたものの、直ぐにその雰囲気馴染み、楽しんだ。

夜はゆずるの部屋で寝る事になった。ゆずるのベッドの横に、母親が布団を敷いてくれた。

ゆずるの部屋はいたってシンプルで、目立った物と言えば出窓に置

かれた一輪の植木鉢だった。それは深紅の花弁を持ち、窓から降り注ぐ月光に照らされて艶かしく輝いて見えた。

「いいだろ、その花」

不意にゆずるが言った。

「ああ。綺麗な花だね。何て言う名前？」

「さあ」

ゆずるが花の傍へ寄った。窓から差し込む月光で、ゆずるの表情は窺えない。

「ふうん、解らないんだ、名前」

「うん」

ゾクリ。智里は身を強張らせた。何だか様子がおかしい。その事に気付いたからだ。

ゆずるの表情を読み取ろうと智里は目を凝らしたが、逆光で窺い知る事が出来ない。

ゾクリ。

また寒気がした。智里はゆずるの意識を他へ向けようと必死に他の話題を探した。

だが、一種のパニックに陥っているのだろうか。何も思い浮かばず、それどころか何故か恐怖心が芽生えてきた。

何故だか解らない。解らないが、怖い。

「ゆずる」

智里は相手の所在を確認するかの様に、呼びかけた。だが、返事は無い。

確かに目の間に居る筈なのに。

「この花はね」

ゆずるが唐突に語り始めた。

「真赤な、深紅の花弁をつけるんだ。夜になると月の光を浴びて、甘美な香りを振り撒く。そして僕を夢の世界へと誘ってくれるんだ」

ゾクリ。

「でも、最近こいつ元気がなくてさ。だから栄養をやらないと」
こいつ、とゆずるは言った。まるで恋人を呼ぶかの様に、その声には愛情がこもっていた。

「助けてくれるって言ったよね」

智里は後悔した。

「言ったよね」

黒い影が、目の前に迫る。

「血、頂戴」

その花には幻覚作用があると言う。

五感を麻痺させ、人を夢見心地にさせる。

深紅の花弁。その花から発せられる甘美な香りに、人々は酔いしれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5771b/>

深紅の花

2010年10月16日04時45分発行